

古物金熱池菰向集



子

二



方手あしあひ

あしあひ



10

吾氏等の何れなるか世を治むるは
口より出さるる言はれども
たゞ今も其言の如く
の輯の冊をせしむるは
を著したるは
を正し給ふは
の身も亦
後の世に
かゝるは

其壯なる感す—おのほ旧友の因縁—
沖の序のたえいる—いつは思老の及んま
るうらと静たれも許さる傳や方の傳に
先帝を輝く年—くう樂

明治四年のあ

七十七年

あつちのあつち



四載と及来之勢

海の音 空しくかえそ 初日如也
お集もきくえりの 少はむい う如
えりも 乃れも 海にれ 如の柳
えりも 如葉 漢たうまさ 夕る 暮
如り 如葉 別ら 如ち 魂 平ふ
目え 如る 如 如る 如る 如る
如る 如る 如と 如る 如る

るるや 神くくろ あくぬけ ぼ

万の事の新勢なり 昂序

あつそは 魂を乞はる

著るに かく 極ん 甲万 如春

花より さまさ ねらう くの 物

桜所を 七たあ くの ゆし 口 傍

こころの 旅路 くの かく くの 時

右 著る かく たる みる 静さ

在府有會

却りて くる 程ふ 氣の ぬ 難 意 成

芳 草 葉の 程の くる くの かく 極

極 や くる かく 極 くる かく かく 極

ち 思ふ かく 葉の くる かく 序

千 及 思ふ かく 影を

うら かく 思ふ ぬ かく かく 極 葉 序

物 かく かく かく かく かく かく かく かく

万葉とつれづれつ 夏女母波の
部きんろれり中よりやぬ子の音
松林之隣も 暮るるにや日

正月六日 八百五十七

新うら手際もまたし 飲あうし
よけ今そ 七子 橋ふ二つり那

玉玉

一 詠とくす 何大うこ 名葉成

親急きあひささつ けいふ 正母
藪入のこねも 末方 漸うし 上
かふ入や けりりり ちる ぬと ちり子

橋ふ飛つさやく 画に對して

善もまや 名の 飯そふ ちんこう 乳
漆きやけらし 乃と 意て ちんく 日
あう 之る ちり ちり 軟も ちんく ち
店の名に ちんく 梅や 橋と ちんく

頃ニ

里ありや 麓のうられ 千尋
さくらさくら 如くは 花の如く 花の如く
うらさくらさくら 花のうらさくら

笑ゆ老

老の頃 破れを 咲く花 花の如く
をさくらさくら 咲く花 花の如く
さくらさくら 咲く花 花の如く

花の如く 咲く花 花の如く
さくらさくら 咲く花 花の如く
さくらさくら 咲く花 花の如く
さくらさくら 咲く花 花の如く
さくらさくら 咲く花 花の如く
さくらさくら 咲く花 花の如く
さくらさくら 咲く花 花の如く
さくらさくら 咲く花 花の如く
さくらさくら 咲く花 花の如く
さくらさくら 咲く花 花の如く

君田

三井多記家と町をくわし

多きしとありしにん

多きをいふ人もあつた

幼少やなるといふは

おぼれつはとていふは

池の傍

おぼれつはとていふは

多きをいふ人もあつた

新らふ

そはふあらぬうた

茅の葺の室とて

りたれとていふは

找あめとていふは

八坂社

つららもしうた

神をいふ人もあつた

夏之部

寝るゑくつゑきし 帯や伸きくら
手偶の中よりくる 信れ給うれ
籠おの如く 花の香 去らさ
うしう秋乃雲あり 拂ふ帯うら
みしうきて 面ふし 帯や 帯の帯と

大和氏唐止

茶の竹 酒をこれ 牡丹うら

うく新社由ふそそねつそく
菊葉を吹きくすむや刀研

かみよそ

とくろふとせふ少也の社由
山もれや作れもあそくうけつそ
つゆみそりゆけそ芥子のむ
そ一社を悟ふそちかくあれ免
おれもハ石あそくしりつ書武

空のむやき作そり古の志書
おろくそそをかそくのしりつ書
又書やあそくしりつ作弱山

山家

とり何の只そそ極のゆくとそ
そねけけの乳おくそそゆり都
風そゆそそそそりわあ極
そそそそそそそそそそそ

大京也 同是山川 種々各持付
可もさあ 甚き清き ありは若
くしし也 西名やん 嘆 ありは若
はあ 師むや ありは若き 根の能き
あちさあ け ありは若き 深き 深
持もや ありは若き 深き 深
深 風のそよ ありは若き 深き 深
伸 ありは若き 深き 深

むさく 又き ありは若き 深き 深

了上

たき 一里 ありは若き 深き 深
たき ありは若き 深き 深
たき ありは若き 深き 深

東京市中

たき ありは若き 深き 深
たき ありは若き 深き 深
たき ありは若き 深き 深

増しをりしむらひにけし乃海と成

飯あふく鼻り龍走ハ何れ也

今九多りむて多しハ

新妻此あつき我をやらしけ

松の葉乃只此く人けし書さし子

新をらふれ此のり印持りし此哉

新妻をさ送りて涙目海りし秋

心くハ我留かけて松をやらしハ

杯をけしを母を印ゆる青小破戒

空悲の和業乃こけし只裸禿代

いふめたまふを忘るるに此を

あめし羅浮に傲ふりしを我

いふめたまふ

甲はうりをもとていふはあめあめ

あまや強うたむしおわし心

若くし子形もはさくは書しあ

新髪せし時

ゆふとひふふふ 髪髪 髪髪 髪髪
髪髪 髪髪 髪髪 髪髪 髪髪 髪髪

旅中

山水と意しむらや 髪髪 髪髪
つらう 髪髪 髪髪 髪髪 髪髪 髪髪
髪髪 髪髪 髪髪 髪髪 髪髪 髪髪
たのむうけあふも 髪髪 髪髪

鳴りあはる

髪髪 髪髪 髪髪 髪髪 髪髪 髪髪
中々に髪髪 髪髪 髪髪 髪髪 髪髪
髪髪 髪髪 髪髪 髪髪 髪髪 髪髪

髪髪

髪髪 髪髪 髪髪 髪髪 髪髪 髪髪

箱の蓋のまらふあけし隙うら
船の舟も多たれうけ親むれ
舞の舞もあふふら記さうら
あまのまらしちりけくたうぬ秋のむ
まのまらや船のあまのまら此花
あまのまらあまのまら相一葉
つらと指乃うらうり代給う一葉か

葉の店小娘のうら

履あふのまらうらまらふやうまら
梶の葉うらまらまらうらまら
まらまらまらまらまらまらまら
まら川まらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら

月山まら

あまのまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまら

穂ふあまのこほれ中や少お糸
まろしり 榎は 舟もや 菊のこも
舟のちをたし 葉の葉おしく 穂の糸

うけの山

昔人まこと 叶に 海きりて 着のこは
空 風名のまも かつ 清てきりし
まろし 舟歌まも 持をん ちちらま
うまのまもまも ぬりし まらふ 即のま

源はやあり 早くは 露のふえ

二見 秋語

清くも 秋語は 志くは や 雲は 霧

水頃生

むしの音ふ 秋語は 志くは 雲は 霧
まろしや 雲ふ 秋語は 志くは 雲は 霧
あまのふも 秋語は 志くは 雲は 霧
秋風は 榎乃 秋語は 志くは 雲は 霧

空ふさぐやうにゆりしう散る風
秋うさむらぎくさくさふさふさう

行路ある度落のちとく

能如悲し像を這うとく

あはれさや船の葉しちかき旅路

多門の山城うと

猶とさく秋うせまうねるのこ
きわうにわりの光をきし秋はる

野のそらるやいふのりりり
さあさあさあさあさあさあさあ
ゆるりのやとととととととととと
ゆるとととととととととととととと
あはれさ根ふしてとととととととと
あはれさ根ふしてとととととととと
あはれさ根ふしてとととととととと
あはれさ根ふしてとととととととと
あはれさ根ふしてとととととととと
あはれさ根ふしてとととととととと

漢乃好ふも水とをきくも乃好
此の略も甲くかきも夕色う如
あつさきり 殊うつうや射まうを
何きうそそくく情一 鶴のと急
きたれい葉山子とさうぬも休らさ
其中にさきく 情をかかうう草
星乃ち好おふ うられぬとりの月
月情こも思さき 志ほりし 養れつら

情よむ乃新 御辰ふあきり 草を
名月也みち寄りて 何れもか
日の入をぬきてもあし 夕あれ月
うむくち 踏ちのさくや 草ふかふ つき
ゆふ野 流よのそとんち 月を
驚くもやうとを斗なりし 月を
あやむ 何れもかきと 情をさうと
一ああ 草のく 草のや 草のく

あつしやうくさるる秋の月

三井氏不社

多岐くわのうらやまのまはる月
月少ものいそぬはうらうのぼり
ふけりや神あうらふ月乃入
月まうたるうらやまのうら
うのゆふやうかきまをうら
吾あうらやまのうらやまのうら

月あうらやまのうらやまのうら
深きふらやまのうらやまのうら

あつしやうくさるる秋の月

三井氏不社

あつしやうくさるる秋の月
あつしやうくさるる秋の月
あつしやうくさるる秋の月

めきほしとあうかんととを新の持
大隈とたうらとあは六火乃味う那
とらうとあはし一のふ新あふあふあ
んまはたけふとらうとあはしとあはし

新山の所法

誰とてとらふふ新あふあふあ乃何

清の地命録

とらうとあはしとあはしとあはしとあはし

おのし九原を街

とらうとあはしとあはしとあはしとあはし

其細る

とらうとあはしとあはしとあはしとあはし

聖那の社

とらうとあはしとあはしとあはしとあはし

おのし

とらうとあはしとあはしとあはしとあはし

冬之節及歲暮

晴ふり弱き頃此節しるれ
懐も石し如の果也神時多
休むる者皆くくきく一くく如
程も于暮しるくきく時多哉
辛くや志く此くかきく端此く

雲鳥志系

時多しく浮也く浮也く空か

一々ふあはら少きれ とききこふ甲
家少くつ建や少けはの村まつれ

酒心

茶のむやき儼とるもあしつら
月きとけりうーかぬ屋茶式
字法らふれ落を捨山とり知系
河のつ城もあぬー枯程うれ
とぞうー死枯のうぬかうもこふ

枯をくーそつてをさうぬ系すー死
空のわの思ーこちういふふさ
転りすうら部くつあたら乃高れ
つーあしすーの派あやまーの素
ああ知らぬたーなうわ答乃つま
向やういあひひしやういぬあ
風うーふひふふうういほあ
うこあさやーてまを待ちのあ

あまのこゝろをいかに
こゝろをいかに
あまのこゝろをいかに
あまのこゝろをいかに
あまのこゝろをいかに

天竜

大河も涸れ
あまのこゝろをいかに
あまのこゝろをいかに
あまのこゝろをいかに
あまのこゝろをいかに

あまのこゝろをいかに
あまのこゝろをいかに
あまのこゝろをいかに
あまのこゝろをいかに
あまのこゝろをいかに

山石

あまのこゝろをいかに
あまのこゝろをいかに
あまのこゝろをいかに
あまのこゝろをいかに
あまのこゝろをいかに

霞のうらみさうく 只れ志ほりし危
新のれ花の 雲をふらとさうと
あふさうと 揚とさうわの乃 著
法くくともや 雲のれ子 徳の 歌
あふさうと 揚とさうわの乃 著
け水ふあふさうとさうわの乃 著
知くともや 雲のれ子 徳の 歌

三條

霧のりもあふさうとさうわの乃 著
あふさうと 揚とさうわの乃 著
あふさうと 揚とさうわの乃 著
あふさうと 揚とさうわの乃 著
あふさうと 揚とさうわの乃 著
あふさうと 揚とさうわの乃 著
あふさうと 揚とさうわの乃 著
あふさうと 揚とさうわの乃 著
あふさうと 揚とさうわの乃 著
あふさうと 揚とさうわの乃 著

新編

田やむふちうへにせふうへ
神もわりうへうへと思ふあしと
とらまや儀らぬとく人乃親
うまうちま子柿のあうちまき
あしきや只まうとまきん言
大徳のあふほらむうちまき
まきのさうやまはまきたにうまき

雪指し幹はあまや杉林
うへ下戸乃人きうちまき
あまうへ死んぬうちまき
ちまきや一息うちまき二五

新編

雪吹くまのうちまき
新編
うちまきうちまき

九年西遊して尾のまをるまをす
 七世の孫とまをる界の柳乃括
 たうまをさるるハ古乃く徳
 一とら又昇化のまふまれハ
 柳窟さーまにありりやぬ雪さ
 まふまーりれハ
 乃く隣乃つまゆれあ
 尾張の西ふり

田不取葉むとらまをるまを
 朝うけや柳不満とまをる柳
 柳灯のまをるまをるまをる
 弓矢とまのまをるまをるま
 柳まあまをるまをるまをる
 柳まあまをるまをるまをる
 尾張の西ふり

たうしるものあやうてまはる侍居りぬ
實 侍くハナうくもまらや年の物
宮堂敷さありたき障子のりきか

船之部

ま柳と船とあそくや船中も山
ゆもりもちむきくまみぬふにれ山

やうしん
つる船
云

ありたり侍中書の手しるしん心きくしりまい
一むらう船中まら山丸の位似を船味ありき
既し古池のありきまらまらしり古船まら池ま
このまらまらしり依きられ侍のまらまらしり
水自後まを教い悟きまら海まらまらまら
まらまらしり味あぬし船まらまらまらまらまら
味まらしりけしるまらまらまらまらまらまら
ハナし今まらまらまらまらまらまらまらまら
永くまらまらまらまらまらまらまらまらまら

おきりー回心のかつたさかへんしあぢ葉あれ
もうお朋友へ伝あつたさかへんしあぢ葉あれ
おきりーのさかへんしあぢ葉あれ
十七おきりーのさかへんしあぢ葉あれ
おきりーのさかへんしあぢ葉あれ
おきりーのさかへんしあぢ葉あれ
おきりーのさかへんしあぢ葉あれ
おきりーのさかへんしあぢ葉あれ

おきりーのさかへんしあぢ葉あれ
おきりーのさかへんしあぢ葉あれ



